

第2章

景観に関する現況特性

- 1 自然景観要素
- 2 歴史・文化景観要素
- 3 都市景観要素

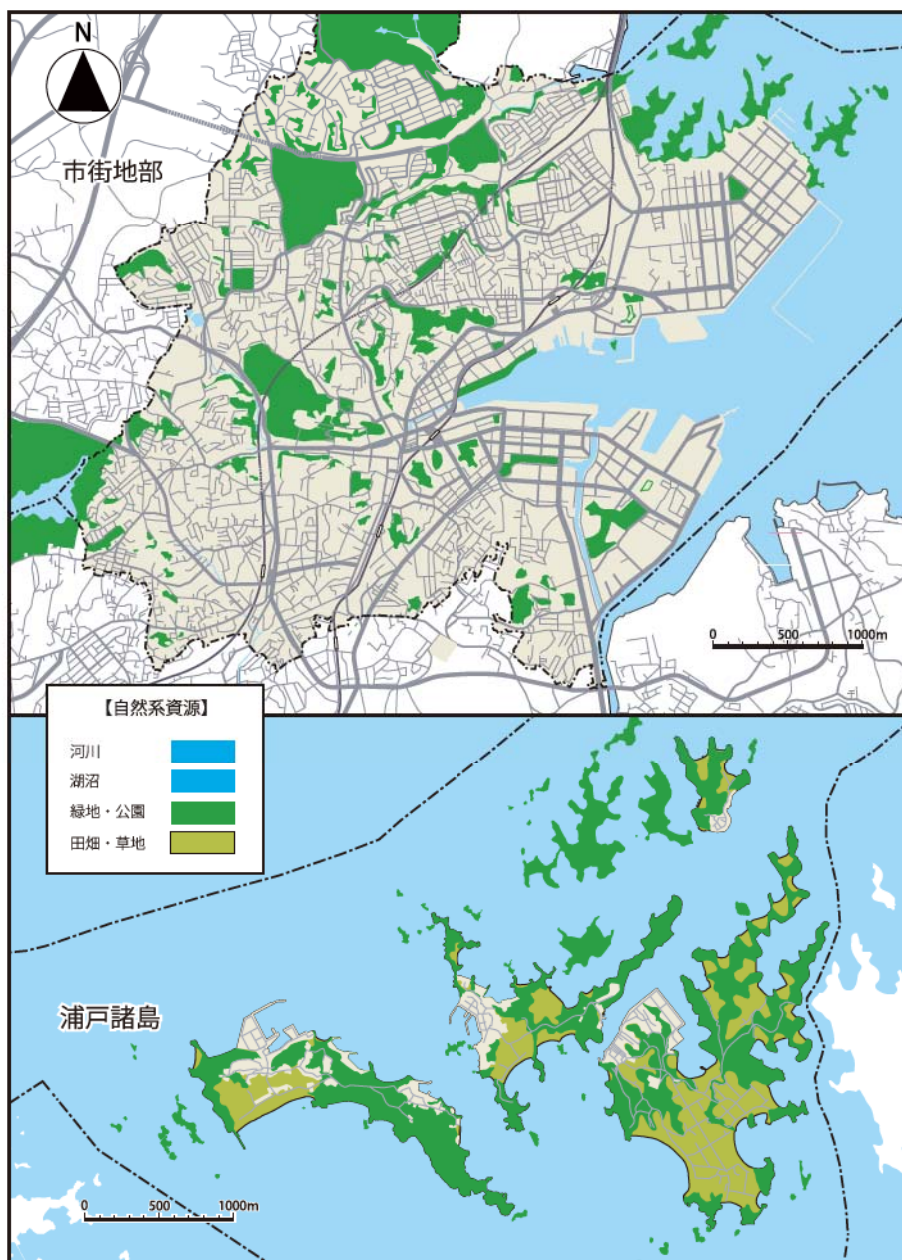


「菜の花」
（浦戸諸島）

第2章 景観に関する現況特性

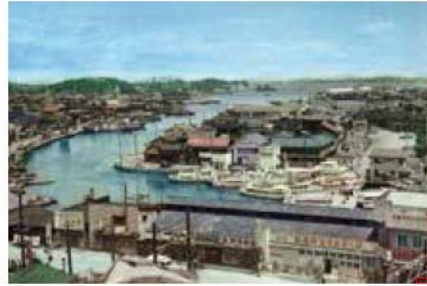
1 自然景観要素

本市の自然景観要素としては、地形、水辺や緑地空間があげられます。まず、地形は、おぼれ谷と呼ばれる変化に富んだもので、市街地の東側に塩釜湾（千賀の浦）が広がり、さらに松島湾に浮かぶ浦戸諸島に続いています。水辺空間は、小水路のみですが、野田の玉川に代表される著名な流れや、歴史的な運河がみられます。緑地空間は、市街地では一森山や伊保石、加瀬沼周辺、杉ノ入裏にまとまって残されています。浦戸諸島では、特別名勝松島を象徴する松林などが保存されています。





海岸通
昭和30年代



現在



(1) 変化に富んだ地形と塩竈石

本市の地形は、大きく3つに分かれています。まず、塩釜湾に面した中央低地は、概ね明治以降に塩釜港の港湾業務用地として海面の埋立てにより造成されました。次に、その背後には、かつての入江の痕跡が崖として残りながら、標高30～100mの台地性丘陵が広がり、住宅地として利用されています。さらに、杉ノ入裏から浦戸諸島にかけては、地殻変動により形成されたおぼれ谷地形と呼ばれる島や岬が織り成す複雑で風光明媚な地形が広がっており、特別名勝松島の一翼を担っています。

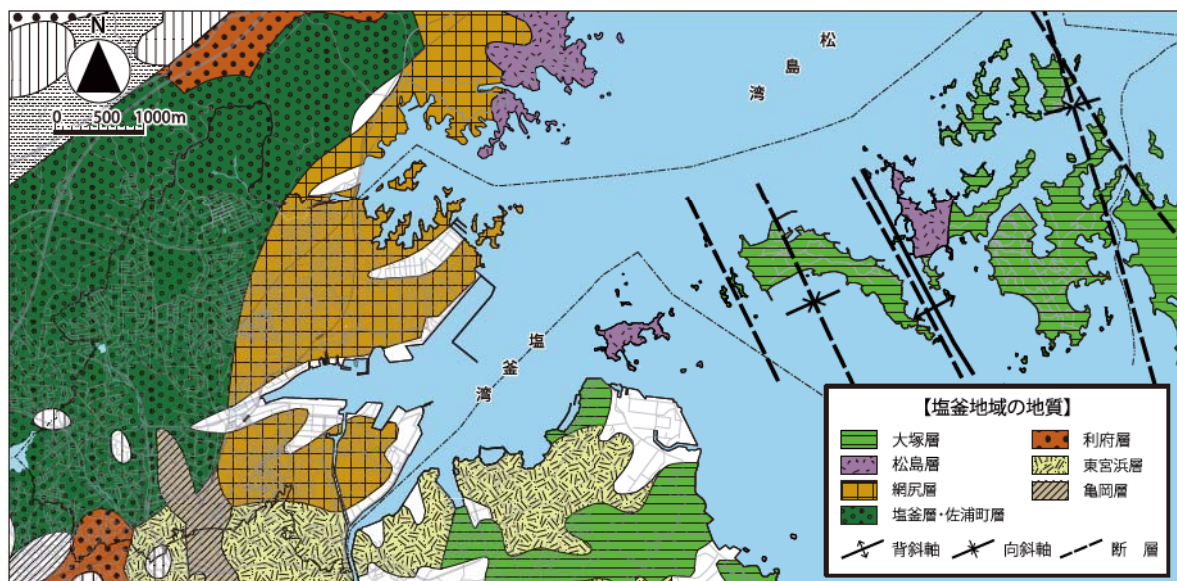
これらの変化に富んだ地形は、市街地の前面に美しい庭園が広がるような印象を与えており、本市独特の景観を形成しています。

また、市街地から浦戸諸島にかけて、塩釜層、佐浦町層及び網尻層と呼ばれる地層が塁層をなし、屏風状の海食崖が美しいシルエットとなっています。

そして、網尻層最下部の軽石凝灰岩は「塩竈石」と呼ばれ、本市に数多く残る石蔵や歴史的建造物の建築材に用いられており、本市の“まちの色”といえます。



市街地の前面に広がる庭園のような風景



出典：塩竈地域の地質 通商産業省工業技術院 地質調査所(昭和58年)

市民の声

塩竈のまちづくりそのものが、市民の文化であるという気持ちを皆さんに持ってもらいたい！

※P-25の「市民アンケート調査」で寄せられたご意見を紹介します！



「花まつり」
(4月第4日曜日開催)



(2) 著名な水辺空間

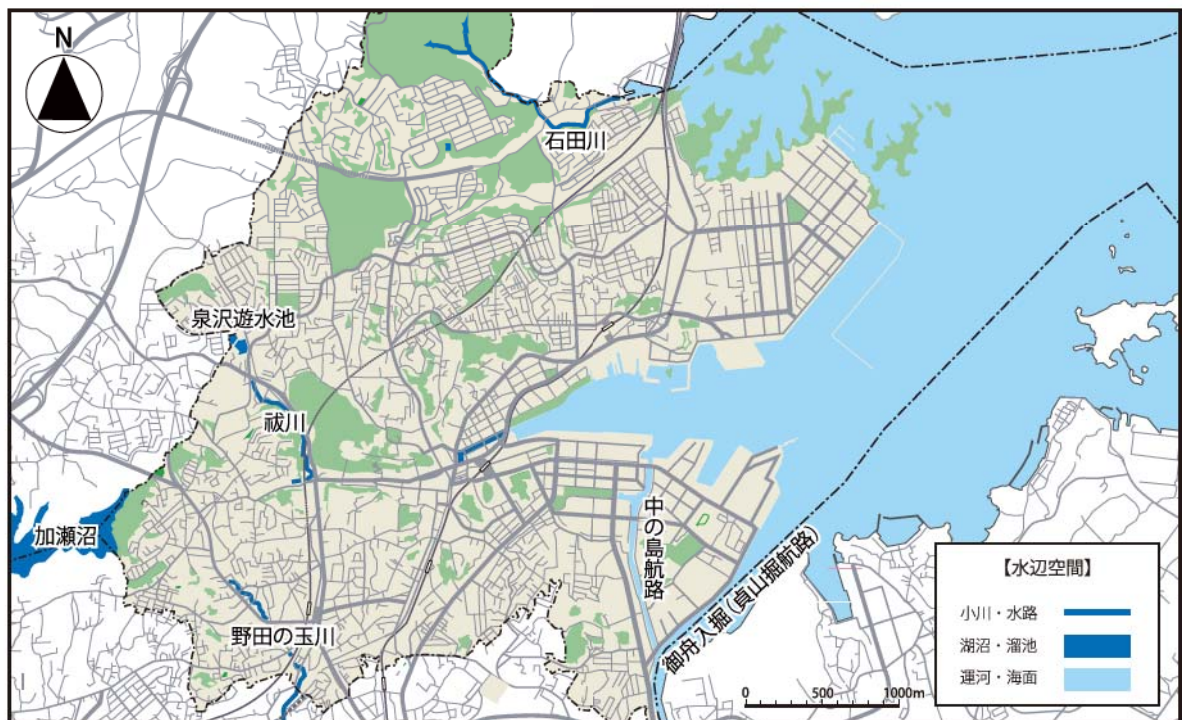
本市には河川がなく、すべて小水路で大半が整備されています。その多くは歴史的に著名な水辺空間であり、特に歌枕ともなり日本六玉川に数えられている野田の玉川は、母子沢を源流に一部暗渠化され多賀城市へ流れています。また、志波彦神社 鹽竈神社(以下、鹽竈神社)参拝の際、身を清めたといわれる祓川は、泉沢を源流に西町から暗渠となり、新町川、新河岸川と名を変えながら宮町川と合流し、開渠で塩釜湾へ注いでいます。伊保石を源流とする石田川は、吉津地区で伊保石水路と合流し、利府町の須賀漁港へ注いでいます。

最も大きな水辺空間である中の島航路は、塩釜港と御舟入堀(貞山掘航路)を結ぶため、塩釜港の第一期工事で昭和8年に完成し、現在は、多くのプレジャーボートが係留されています。また、寛文13年(1673)完成の御舟入堀は、貞山運河の一部を成し、本市の牛生地区から仙台市宮城野区蒲生の七北田川河口を結ぶ運河で、現在本市沿岸は、石油配分基地となっています。

また、唯一残された沼で、塩竈市・多賀城市・利府町にまたがる加瀬沼は、昭和7年から昭和38年まで本市の水道用貯水池でした。昭和59年度からは宮城県により広域公園として整備が進められ、平成26年度に完成し、自然豊かな加瀬沼を背景に野外レクリエーションの中心地となっています。



野田の玉川





「どんと祭」
(1月14日開催)



(3) 市街地に残された貴重な緑地空間

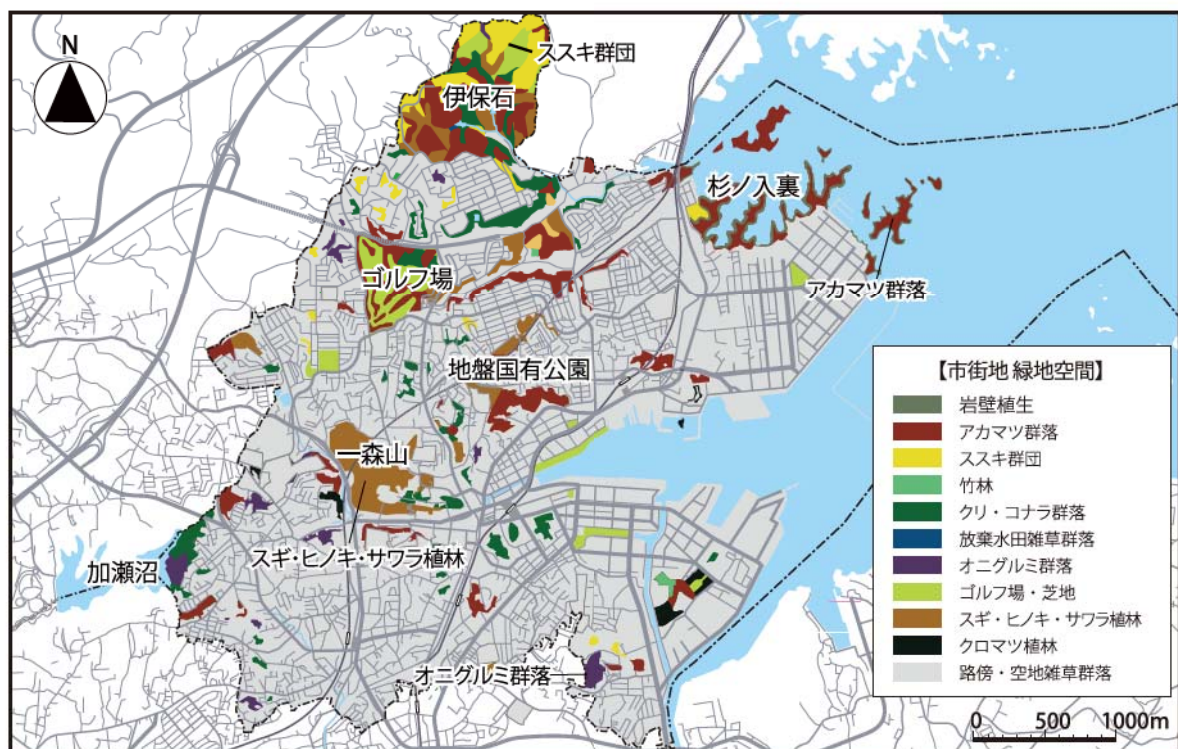
市街地には、社寺林や斜面地、北部の丘陵地に貴重な緑が残っています。特に伊達政宗により命名された一森山は、鹽竈神社が鎮座する 総面積27ha、海拔57mの森で、風致保安林に指定されており、樹齢400年ほどのスギ・ヒノキの美林に覆われています。なお、同地は400年にわたり人の手が入っておらず、自然植生として希少なものも含め600種以上の植物が確認されています。

また、杉ノ入裏の一部は特別名勝松島に指定され、松島を代表する美しいアカマツの松林が残され、伊保石と加瀬沼周辺のアカマツも公園の一部として保全されています。

そして、北浜地区の背後に屏風状に広がるアカマツの松林は、地盤国有公園として保全されており、浦戸諸島からの眺望において、丘陵部の住宅地を緑のカーテンで覆うとともに、塩釜港や中心市街地を北風からやさしく守る役目も果たしています。



北浜地区背後の地盤国有公園



出典:第6回・第7回自然環境保全基礎調査 環境省(平成13年)

市民の声

浦戸は歴史があり、文化や生業も違ってあるので、そこも皆さんに見ていただきたいと思います！



(4) 特別名勝で守られた浦戸諸島の豊かな緑地空間

浦戸諸島の浮かぶ日本三景松島は、明治維新で仙台藩の保護を失い、松の乱伐や寺院の解体、山火事等で危機に瀕しました。そこで県は、松島湾一帯を県営松島公園として、明治44年から5年かけて、約1042haに松や杉など83万本を植林し、観光施設等を整備しました。

この取り組みが、大正12年の史跡名勝天然記念物保存法による名勝指定につながり、昭和27年に、文化財保護法による特別名勝に指定されて自然景観が保護されてきました。

浦戸の植生は、伸びやかに広がる海と空の青さの中に、海食崖の白さとコントラストを描き出しながら、島嶼^{とうしょ}や丘陵をゆるやかに覆うアクセントとして自然景観を構成する重要な要素となっています。

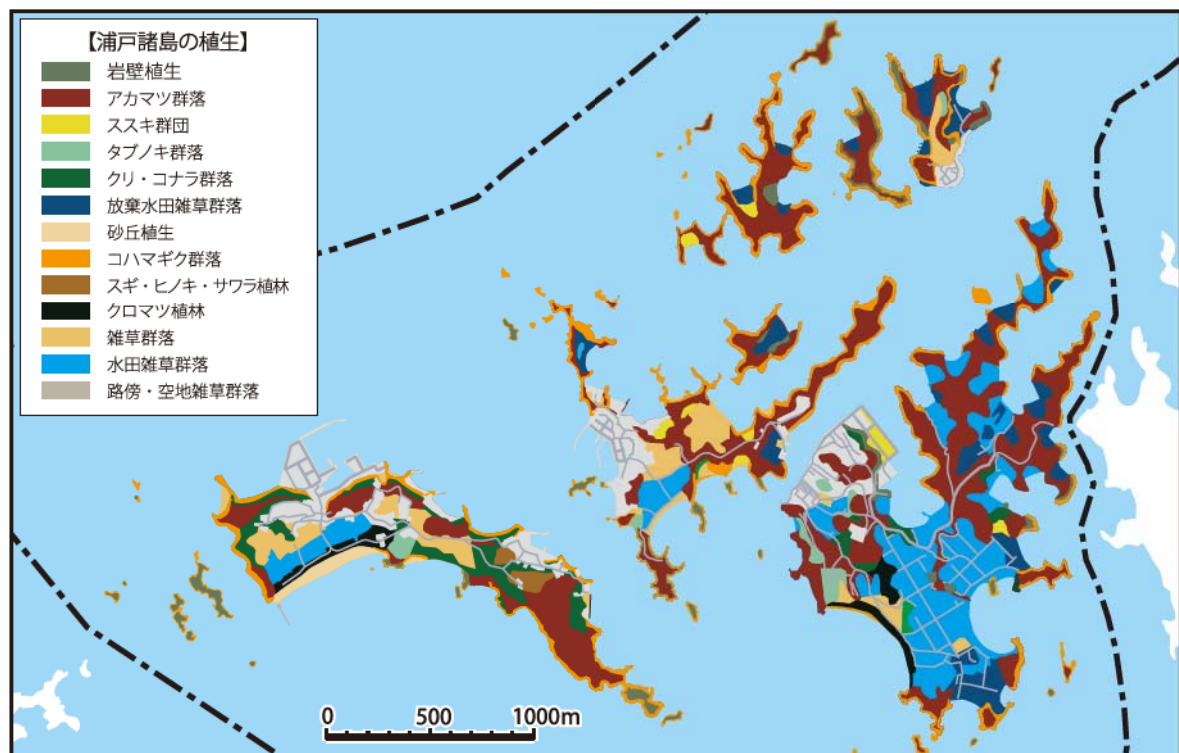
代表的な植生は、マカマツとクロマツで、「松島」を象徴する風景のひとつとなっています。

また、タブノキやヤブツバキなど暖地系常緑樹を豊富に内包する植物群落が数多くあります。

さらに、人々の生業の歴史としてその足跡をモザイク状に残すクリやコナラ、スギなどがみられます。



朴島 タブの森と菜の花



出典：第6回・第7回自然環境保全基礎調査 環境省(平成13年)

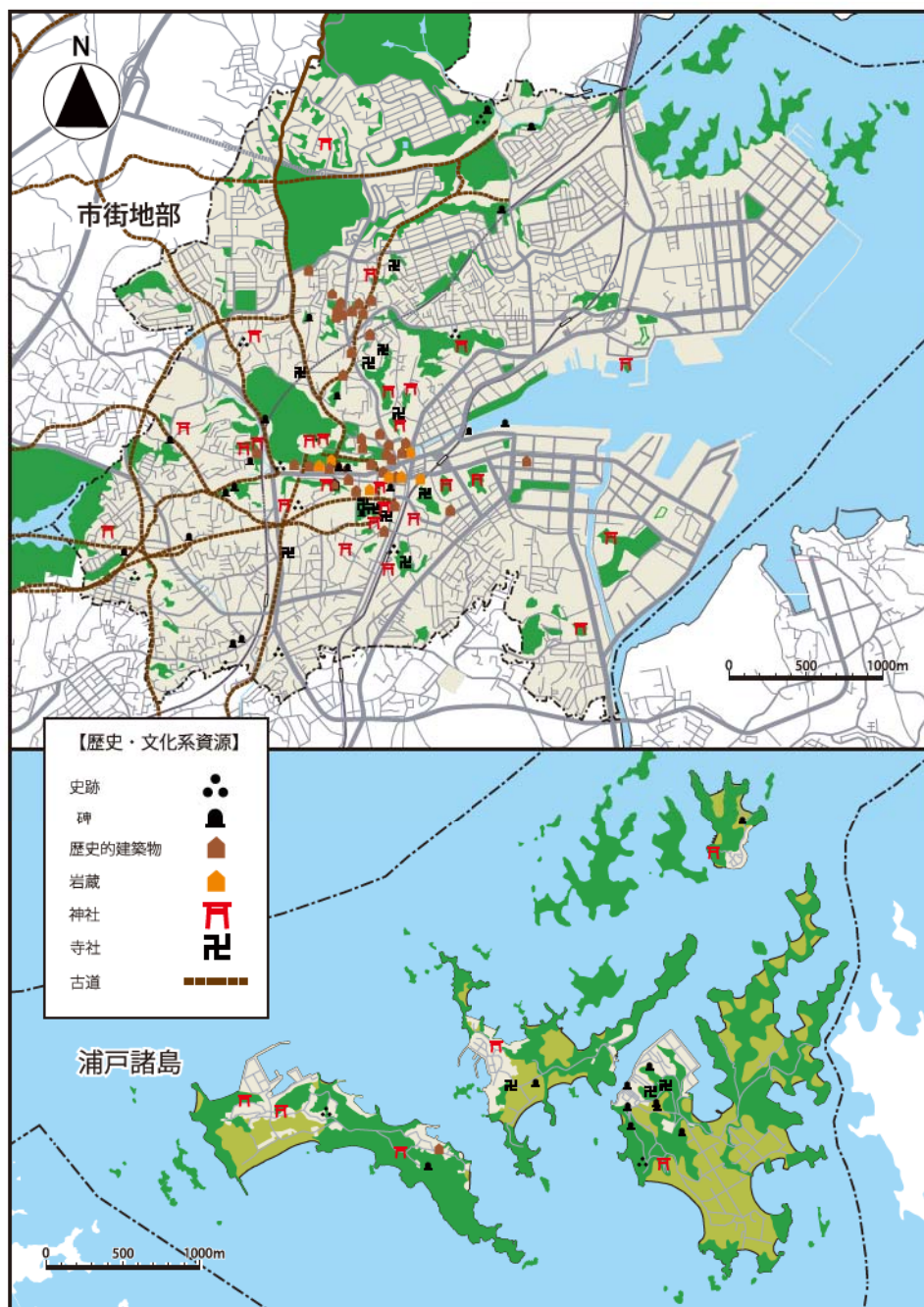


「御田植え祭り」



2 歴史・文化景観要素

本市は、東北でも有数の長い歴史を持つみなとまちであり、奥州一宮鹽竈神社の門前町であることから、旧市街地を中心に各時代の遺跡や石碑、歴史的建造物、寺院・神社などが数多く残されています。また、浦戸諸島には、島の豊かな幸を伝える貝塚をはじめ、江戸時代から明治時代にかけて海運業で繁栄した歴史を物語る様々な遺跡や石碑、建造物などが残されています。



市民の声

塩竈の景観といたら

「鹽竈神社」

「塩竈魚市場」

「塩竈みなと祭り」

が思い浮かびます！



まぐ介



「ワッショイしおがま」
(朱雀連)



(1) 本市の礎である鹽竈神社・塩釜港

本市は、奈良時代の神亀元年（724）、国府多賀城の設置に伴い、国府津千軒という国府のみなとまちとして開かれたことに始まります。また、奥州一宮鹽竈神社が鎮座することから朝廷をはじめ奥州藤原氏や陸奥国留守職、仙台藩へと各時代の権力者に保護されました。特に四代藩主伊達綱村公は、貞享の特令により手厚く保護したことから、仙台下唯一の門戸港、遊興で賑わう門前町として大変賑わいました。

明治以降、塩釜港は、上野～塩竈間の鉄道開通とともに近代港湾の整備が進められ、国際拠点港湾指定の国際貿易港として、また、水産物の一大供給基地である特定第3種漁港として発展してきました。一方、明治7年、鹽竈神社には、仙台市岩切から志波彦神社が遷され、国費により昭和13年に社殿が完成しました。

また、平成14年には、鹽竈神社の社殿が、国指定の重要文化財となり、いにしへの雅な姿を今にとどめながら、全国から多くの参拝客、観光客を集めています。



鹽竈神社表参道

(2) 歌枕の地である塩竈の浦・^{まがき}籬島・野田の玉川

松島湾を望む風光明媚な本市は、国府多賀城に赴いた都人にとって、不思議で趣の深い風景として映り、塩竈の浦（千賀の浦）や籬島、野田の玉川が歌枕の地となりました。

特に愛でたのが光源氏のモデルといわれる左大臣源融（みなもとのとおる）で、塩竈の海景色を現在の京都市下京区本塩竈町周辺に大庭園（河原院）として再現し、その美しさを誉め称えたことから都中に知れ渡り、小倉百人一首に名を連ねる紫式部や紀貫之、能院法師など著名な歌人により数多くの歌に詠まれ、現在でも317首の歌が残されています。



籬島



野田の玉川の碑



(3) 貴重な価値を有する文化財

本市の有形文化財は、鹽竈神社の門前町として賑わった市の中心部と海運で繁栄した浦戸諸島に多く残されています。まず、鹽竈神社の社殿は、江戸時代中期の神社建築としての価値が高く、平成14年に国指定の重要文化財となりました。その他の多くの社寺も文化財に指定されており、地域のシンボル、心のよりどころとなっています。また、浦戸諸島では、寒風沢造艦の碑や十二支方位石など多くの石碑が文化財に指定されており、島の片隅で往時の貴重な様子や記録を伝えています。近年では平成26年に、老舗和菓子店「丹六園」が国の登録有形文化財に指定され、歴史的景観整備を推進してきた鹽竈海道を行き交う観光客の目を楽しませています。さらに、塩竈市公民館本町分室も市の文化財に指定され、杉村惇美術館としてリノベーションし、昭和のレトロな建築文化を色濃く残す建築物として活用・保存されています。



丹六園（国の登録有形文化財）

(4) 往時の面影を伝える歴史的建造物

本市の歴史的建造物は、高度経済成長期や街路事業、東日本大震災により多くが失われてしまいました。しかし、今も往事の面影を伝える建造物が、市の中心部に点在しています。

町屋建築の特長は、脇通路型と呼ばれる仙台藩領特有の形式で、京町屋と異なり、狭い間口で奥まった敷地であっても、門を設けて店舗、住居、蔵が配置された独自の建築となっています。

さらに、明治以降は、岩蔵などに本市産出の「塩竈石」や「野蒜石」（東松島市）を用いたものが多く、“本市の色”となっています。

また、邸宅建築は、明治以降の港湾の繁栄を象徴しており、和館と洋館が併置された亀井邸をはじめ、風光明媚な塩釜湾の眺望を獲得するため、海側の開口部を大きくとり、丘陵部に建築されています。



荻原邸（町屋建築）

市民の声

それぞれの家がまち並みに関わっていることを自覚し、街を美しくするという意識を持ってほしい！



「絆」

(初穂曳 11月23日)



(5) 鹽竈神社の門前町としての祭り

奥州一宮鹽竈神社には、40万人の人出となる初詣をはじめ、どんと祭、節分祭、七五三などで、多くの参拝客があります。四季折々の様々な祭事が市内で繰り広げられ、門前町としての歴史を今に伝えています。

3月10日の「帆手祭」は、本市で最も古い祭りで、天和2年(1682)から続く火伏せの祭です。また、4月の第4日曜日の「花まつり」は、安永7年(1778)から続く天候を祈る祭で、現在は市民まつりが併せて開催されています。これらの祭では、日本三大荒神輿の一つといわれる重さ1tの大神輿が市内を練り歩きます。最大の見所は、二百二段の表坂を出御・還御される時で、その緊迫感には息を呑みます。

7月4日～6日の「藻塩焼神事」は、鹽竈神社の末社である御釜神社において行われ、古代の製塩方法を今に伝える宮城県の無形民俗文化財となっています。

7月10日の「鹽竈神社例祭」は、年に一度の大祭で、藻塩焼神事で出来た塩をお供えし、勇壮な流鏝馬神事が行われます。

7月第3月曜日(海の日)の「塩竈みなと祭」は、日本三大船祭の一つに数えられています。二隻の御座船、鳳凰丸と龍鳳丸に、鹽竈神社と志波彦神社の大神輿を奉安し、五色の吹き流しを飾り立てた大小約百隻の供奉船を従えて松島湾を渡御する様は、平安絵巻そのものです。普段、二隻の御座船は、港奥部に係留されており、観光客の目を楽しませています。

11月23日の「新嘗祭・初穂曳き」は、御神田で収穫された初穂を塩竈の地場産品とともに奉曳車に載せ、氏子約千人が鹽竈海道から神社まで奉曳する実りの秋の風物詩となっています。

また、近年は市民が主体となり、鹽竈神社の境内を舞台に、4月に「しおがまさま 神々の花灯」、9～10月頃に「しおがまさま 神々の月灯り」が開催され、新たな取り組みとして好評を博しています。



帆手祭



塩竈みなと祭



しおがまさま 神々の月灯り



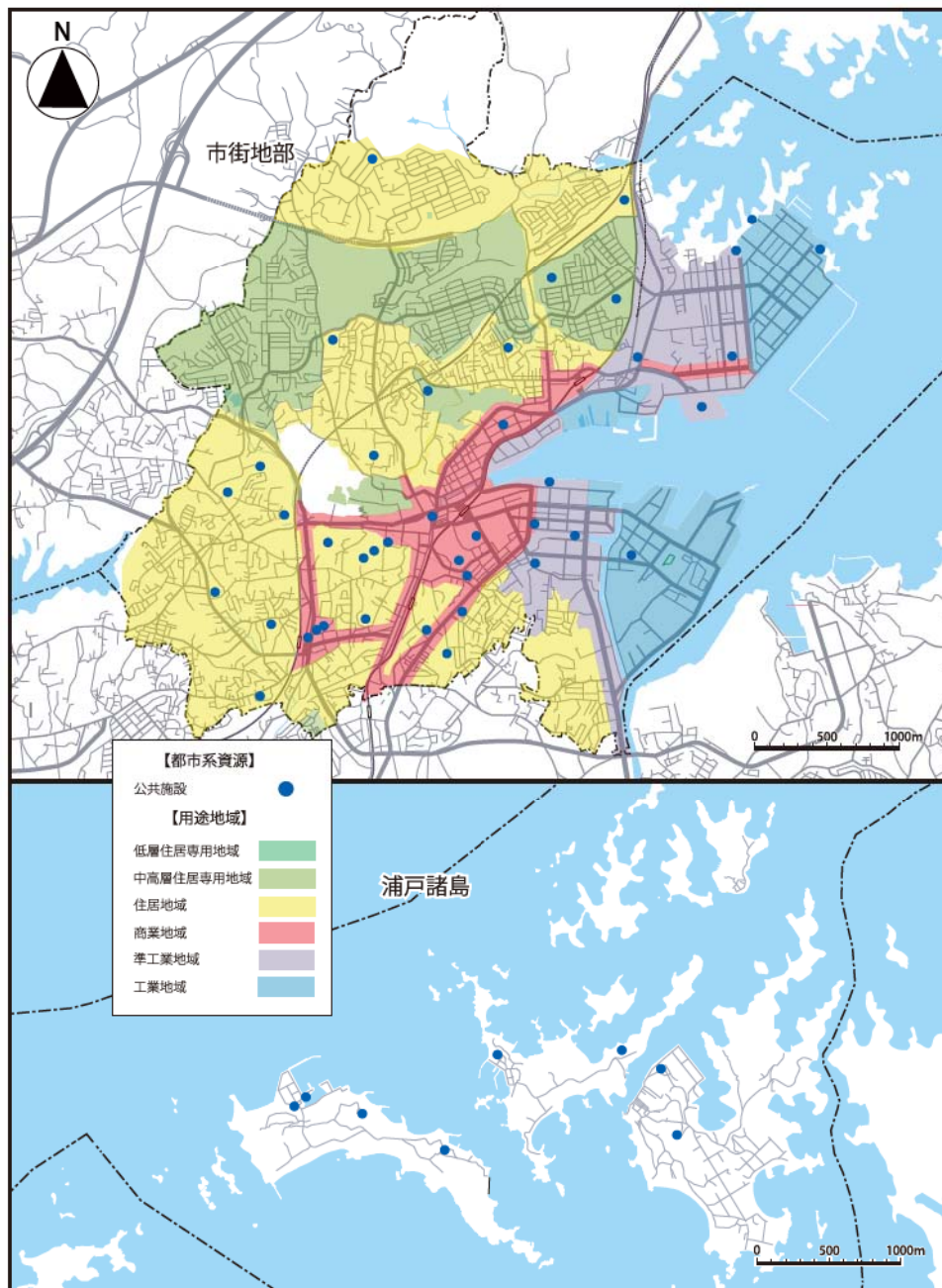
「港まつり前夜祭」
(塩竈みなと祭前夜祭 花火大会 7月海の日前日)



3 都市景観要素

本市の都市景観要素は、土地の利用状況と公共施設が挙げられます。主な土地利用としては、東部の臨海部に工業地、中心部に商業地、それらを取り囲む住宅地となっています。

なお、一森山と伊保石、特別名勝松島に指定されている浦戸諸島などは、市街地外（市街化調整区域）となっています。また、国や県の施設や市役所庁舎などの公共施設は、市内各所に点在しており、ランドマークとして重要な景観要素となっています。



市民の声

身近な美化活動等で
まちを気持ちよく歩
けるようにすれば、
交流人口の増加につ
ながると思います！



シオンちゃん



「しおがま博の見学」
(巡視船の見学会)



(1) 丘陵部に広がる住宅地

本市の住宅地は、明治時代以降、主に海面の埋め立てによって生み出されましたが、大正末期になると、丘陵地である梅の宮周辺に知識人等の別荘や住宅地として、田園都市の思想に基づく「塩竈文化村」が造成され、計画的な住宅地開発の先駆けとなりました。

しかし、戦後の混乱期から高度経済成長期における急激な人口増加は、無秩序な住宅建設を招きました。そのため、本市事業として西部地区において、大日向団地、新玉川団地、清水沢団地が次々と造成されました。

昭和45年代以降になると、北部地区において民間企業により松島湾の眺望を売りにした松陽台や楓町、青葉ヶ丘などの大規模な宅地が開発されました。平成に入ると千賀の台をはじめ北部丘陵地の大部分が住宅地となりましたが、周辺には斜面緑地が多く点在し、眺望に優れた潤いのある住宅景観が形成されています。



松島湾を一望できる北部住宅地

(2) 市中心部に集積する商業地

本市の商業地は、鹽竈神社の門前町として形成された本町から西町一帯が、仙台圏東部の中心商店街として古くから賑わってきました。しかし、昭和40年代後半の「北浜土地区画整理事業」における大型商業施設の進出と昭和56年の「仙石線連続立体交差事業」による本塩釜駅の移転により、商業地の中心は、本塩釜駅を核とする海岸通地区に移動しました。旧本塩釜駅周辺では、平成3年に図書館などを備えた再開発ビル「壱番館」が建設され、人々が集う交流拠点となっています。さらに、本塩釜駅の南側では「海辺の賑わい地区土地区画整理事業」により、平成19年に大型商業施設が進出し、新たな賑わいが生まれています。一方、門前町の面影が残る旧商店街には、老舗が点在しており、観光マップを片手に歩く観光客が増えています。



再開発ビル壱番館



門前町の面影を残す西町



「夜明けの港」



(3) 多彩な顔を持つ港

天然の良港である塩釜港は、大きく四つの顔を持つ港です。まず、外国の大型貨物船が入港し、流通倉庫が建ち並ぶ、国際拠点港湾仙台塩釜港である「商港」としての顔があります。

次に、水産加工団地を背景に、港の新たなランドマークであり建て替えの進む魚市場と、全国でも有数の生マグロの水揚げを誇る「漁港」。そして、日本三景松島観光の海の玄関口マリゲート塩釜に観光遊覧船が発着する「観光港」。さらに、海上の安全を監視する巡視船の基地として第二管区海上保安本部・宮城海上保安部が所在する「海上防災拠点」としての顔です。

プレジャーボート基地や造船所、石油配分基地など多彩な顔を持つ塩釜港は、鹽竈神社の門前町と並ぶもう一つの本市の顔であり、独特の都市景観を形成しています。



貨物船や巡視船が係留される塩釜港

(4) 人々が集う4つの駅と港を望む高架線

本市は、4 km四方の狭い市街地でありながら、J R東北本線 塩釜駅、J R仙石線 本塩釜駅、東塩釜駅、西塩釜駅の4つの駅があります。これらの駅は、100円バスで結ばれ、交通結節点として多くの通勤や通学、買物・観光などの乗降客が行き交っています。

塩釜駅周辺には、「ふれあいエस्प塩竈」や「塩竈公民館」、本塩釜駅周辺には、市の壺番館庁舎、市民図書館などが入居する「壺番館」があり、様々な人々が集う利便性に優れた空間になっています。

また、昭和56年に連続立体交差事業が行われた仙石線は、ルートが港寄りになり、中心市街地を電車が高架線で行き交う様は、躍動感のある都市景観となっています。特に夜間、マリゲート塩釜からは、銀河鉄道のように走るロマンにあふれた光景を目にすることができます。



港を一望しながら走る仙石線



海岸通地区
震災直後



現在
再開
事業中



(5) 景観の一部となっている幹線道路

本市の主な幹線道路は、南北に延びる国道45号と、国道を起点に周辺市町に向かう県道で、都市としての骨格を成しています。まず、都市軸である鹽竈海道（県道塩釜吉岡線）は、“海と社を結ぶまちづくり”として自然石による歩道舗装や燈籠型の照明、せせらぎ、「鹽竈百人一首」の歌碑などを配置し、門前町の景観に配慮した道路となっています。そして、下馬泉沢町線（県道塩釜吉岡線）も、神社へ至る道筋として、「鬼房小径」などのポケットパークが整備されています。また、八幡築港線（県道仙台塩釜線）～鹽竈街道～国道45号沿線の道筋は、交通の大動脈であり、東側は港湾背後の業務用地、西側を商業や住宅地に分けており、みなとまちと門前町としての本市の二つの顔を、色濃く景観に映し出しています。



鹽竈海道（県道塩釜吉岡線）

(6) 身近で憩える都市公園

本市の規模の大きな総合公園は、伊保石公園と加瀬沼公園があり、自然に親しめる市民のレクリエーション空間となっています。また、近隣公園は、野球グラウンドを備えた清水沢公園や新浜町公園などで、スポーツを楽しむ市民で賑わっています。そして、最も古い塩竈公園は、桜の名所であり、4月下旬に開催される花祭の重要な背景となっています。その他、規模が小さい公園や児童遊園等が数多くあり、地域住民の身近な憩いや遊びの空間となっています。

港の周辺には、緩衝緑地の塩釜港緑地みなと公園と港湾緑地である中の島公園（現在下水道ポンプ場工事で閉園中）があり、港湾空間に憩いと潤いを与えています。また、震災のモニュメントが建立されている千賀の浦緑地は、「シオーモの小径」とともに港奥部の潤いのある空間であり、塩竈みなと祭関連のイベントが開催されています。



下馬泉沢町線（県道塩釜吉岡線）鬼房小径



清水沢公園